



南ぬ風

一般財団法人 沖縄美ら島財団 広報誌

ふえーぬかじ

2018.4~6
Vol. 47
春号



琉球びんがた職人

加治工 撮

KAJIKU OSAMU

文＝いのうえちず

那覇市出身。沖縄大学を卒業後、知念紅型研究所で11年間修行。現在は週に4日、沖縄県工芸振興センターで後進の育成にあたりながら、自らの作品を制作している。第65回沖縄展（2013年）でうるま市長賞を受賞。

先人の仕事に圧倒され、先人が残したものを受け継がせてもらう感覚
 海洋博公園熱帯ドリームセンターで毎年開催される沖縄国際洋蘭博覧会（以下、洋蘭博）。各部門上位入賞者に贈られる紅型作品および出展者に贈られる紅型トートバックのデザインを、2017年から担当しているのが加治工さんだ。古典柄を大切にしながらも、色づかいなどに現代の感覚を取り入れる絶妙なバランス感覚で作品を生み出す、気鋭の若手紅型作家に紅型への想いを聞いた。

古典と現代の感覚、両軸を大切にしたい。

— 加治工さんは洋蘭博の入賞者に贈られる紅型を作られていますね。

洋蘭博の依頼が来た時は、海外の方々が沢山の人に自分の染めた紅型が贈られるという事は「これはヘタなもの作れないな。」とプレッシャーを感じました。多くの方々に「紅型」として見てもらうので、その良さを感じてもらえるようがんばっています。

— デザインは前年に大賞である内閣総理大臣賞を受賞した作品だと決まっていますね。

はい。丹精込めて育てた蘭がモチーフになる受賞者さんの気持ちも考えて染めるようにしています。洋蘭博のように国際的な舞台は、世界の人に紅型が注目される良い機会。これが何かのキッカケになって、紅型とつながる人が増えるといいなと思っています。

— 2017年の内閣総理大臣賞受賞は、白い小さな花がたくさん咲き揃っている蘭でした。清楚で透明感のある雰囲気表現するのは難しかったのでは？

紅型は白の表現が難しく、今回は花の輪郭を淡いグレーで染め、花びらの中はあえて染めずに布の表情を活かすという表現方法をとりました。受賞蘭の花一つ一つの純白の美しさをどう表現するかに一番気を

使いました。

— 加治工さんが紅型の道に進んだのは、どんなきっかけですか？

ごく普通の大学生だった13年前、たまたま見に行った沖縄展で紅型の美しさに衝撃を受け、卒業後は知念紅型研究所の知念貞男先生のもと11年修行させて頂きました。自分は古典柄が大好きで、先人の仕事には圧倒されます。現代を生きる自分から見ると、電気も水道も、情報もない時代の中であのクオリティ。ただただ敬服です。

— 紅型は、①デザイン ↓ ②型彫り（型紙製作） ↓ ③型置き（型紙を布の上に置いて糊つけ） ↓ ④配色（じみを防ぐ呉引き後、色差し） ↓ ⑤隈取り（影をつける） ↓ ⑥蒸し（色を定着させる） ↓ ⑦水元糊を洗い流す ↓ ⑧糊伏せ（すでに染まった部分に防染作業を施す） ↓ ⑨地染め ↓ ⑩蒸し ↓ ⑪水元という工程を経て製作されます。大変な手間ひまがかかる仕事ですね。

紅型は、一本の線を表現するにも、これだけの工程が必要です。型紙を彫るためのシীগ（小刀）や、ルクジュウ（型紙を彫る時に使うカットイングボード）役の土台。島豆腐を乾燥させたものなどの道具も自作します。「いい仕事をしたのなら、いい道具を作れ。」と先生方からの教

えがあります。先人方のすぐれた仕事をみると、どんなシীগでどんなルクジュウを使ったらこんな彫りができるのか？とワクワクして見入ってしまうんです。自分は紅型を「やらせてもらっている」という感覚。先人達が残し、紡いで来て下さったものを受け継がせてもらっている。だから昔の技術、技法を知りたいし知る努力を続けていかないとけないなと思っています。

— 加治工さんの作品は古典柄をコピーするだけでなく、古典柄を大切にしつつも、現代的な色彩感覚で、今を生きる人が身につけたり使ったりしても違和感がありません。時には古典柄をアレンジしたオリジナルデザインも製作されますよね。

古典と現代を生きる自分の感覚、この両軸を大切にしたいんです。どっちかバランスが崩れても、何とかか。グルグル回るだけで前へ進めない気がしています。

— お土産品として販売される工芸品や小物類などの製作を含めると、紅型に携わる職人さん、作家さんの数は少なくないと思われませんか？

正直、紅型で食べていくのは大変です。自分たち若手は、既に先輩方が活躍されている場へ新規参入者としてチャレンジしていく事になりま

さや達成感もあるんですよ。手塩にかけて作ったものを、喜んで買ってもらえる、喜びの連鎖でもある。だから、先人たちに恥じないように、自分なりに伝統をかみくだいて表現できるようにと思っています。

— 現在、沖縄県工芸振興センターで研修生に紅型を教えていますよね。

講師としては、古典の色はこう、と教えていますが、作家としての自分にはポップカルチャーの影響も受けて、ちょっと力の抜けたものや、遊び心のあるものを作ることもあります。今では古典になっている柄や色も、当時は外国の影響を受けながら生み出された、言わばファッションの最先端。薩摩や江戸、清国に輸出された紅型が残っているおかげで、現代の作家が学び取ることができるとも思いますよ。考えてみれば、厳しい身分制度があったり、決まった家の人しか紅型に携わることが許されなかった琉球王国時代に比べ、好きでさえあれば誰でも紅型の世界に入れる現代は恵まれていますよね。自分はまた自転車操業の若輩者ですが（笑）、個展も開催できるようにもっと精進したいと思います。その分、気合いを入れて頑張ります。



シীগとルクジュウ。シীগには、刃の粘りなどの好みに応じて、カッターナイフや糸ノコギリなどの刃を用いる。



2018年2月に開催された洋蘭博で受賞者に贈られた紅型の作品。

contents

美ら島をつなぐ人 02
 おきなわ歳時記 04
 魚のふしぎ 05
 熱帯植物ずかん 05
 調査研究 06
 普及啓発 08
 御城物語 09
 沖縄の大木 09
 運営管理 10
 スポットライトの向こう側 12
 財団いんふお 14
 編集後記 15
 おもろさうしの植物 裏表紙

作品タイトル「たわわの果实」
 沖繩美ら島財団理事長賞
 大学院では創作手結紮を研究した大城さん。この作品は、経糸緯糸ともに絹糸を使用し、合成染料で何色にも染め分け、高度な柄合わせの技術が必要とする「経緯紮」の技法を用いた。着物でありながらポップアートのような表情は、「楽しく身につけられる着物や服飾品を作りたい」と語る大城さんの可能性を十分に物語る。
 沖縄県立芸術大学大学院 工芸専修 織研究室2年
 大城 あすかさ（沖縄県出身）
 47号から50号までの1年間は、沖縄県立芸術大学 美術工芸学部・大学院造形芸術研究科「第29回卒業・修了作品展」で受賞した4作品が表紙を飾ります。若い才能にご注目ください。
 誌名「南ぬ風（ふえーぬかじ）」とは…
 南ぬ風は、梅雨明けとともに南から吹き込んでくる強い風のことで、この南の風によって育まれてきた沖縄の自然や文化をさらに「南ぬ風」に載せて全国に発信していきたいと思っています。





巣穴から顔を出すチンアナゴ



チンアナゴの全身

チンアナゴは、ウナギ目に属する魚で、寿司ネタとして知られるマアナゴに近い仲間です。細長い体型で、全長40cm程になります。顔がイヌの「狎(チン)」に似ていることから、「チンアナゴ」と名付けられ、成年である2018年は多くの水族館で展示され人気を呼んでいます。砂に巣穴を作って隠れる習性があり、巣穴の深さは全長の2倍以上になります。捕食の際も含め、チンアナゴは生涯巣穴で暮らします。

魚のふしぎ vol.05

チンアナゴの巣穴

砂に掘った穴は埋まることありません。それは、実は体から粘液を出し、穴の周りを固めているからです。巣穴を作る時は、尾の方からジグザグに砂をかいて穴を掘ります。その後しっかり固めれば、外敵が侵入できない絶好の隠れ家になり、更に夜は寝床にもなるという、チンアナゴにとって大事な巣穴。中をのぞいてみたいものです。

(増山理佐子)

おきなわ歳時記

文いのうえちず

Vol.10



親族が集まり、ご先祖さまに手を合わせる御願からスタート。線香やウチカビ(あの世のお金とされる紙)などを捧げる。写真提供：小早川渉(おきなわフォト)

4月の週末になると、お墓で人々が宴会を開いているような光景が、沖縄本島中部を中心に見られる。「清明」または「清明祭」と呼ばれる風習で、首里では「御清明」と言う。

これは二十四節気の一つ、「清明節」に祖先の墓参りと墓掃除をするという中国の風習が沖縄に伝わったものだと言われる。中国での別名は「掃墓節」「祭祖節」、緑が美しく散策に適した時期であることから「踏青節」とも呼ばれる。この風習が沖縄に伝わった時期は定かではないが、1736年に一門で清明祭を行うと決めたという記録(※『四本堂家礼』)や、1768年に王が初めて玉陵で清明祭を行ったという記録(『球陽』)があることから、この頃から祖先祭礼の一つとして定着し始め、士族から庶民にも広がっていったと考えられる。

近いご先祖さまを祀る「当世墓」だけでなく、遠いご先祖さまの墓参りをする「神御清明」や、集落で墓参りの日取りを決めて一斉に行う「チュムラシーミー」などもある。基本的には父系の親族集団である門中行事の一つだが、父方・母方両方の墓参りをする人も多い。通常、清明節は4月上旬頃になるが、現代では柔軟にとらえ4月から5月の大型連休にかけて行うところが多く、毎週末お墓参りだということ人もめずらしくない。

清明



祖霊と共にいただくごちそうは、餅や豚肉などの入った重箱がメイン。最近はオードブルや寿司、チキンや洋菓子が並ぶ家庭もある。

※久米村(現在の那覇市久米)の祭家の冠婚葬祭に関わる礼式や慣習をまとめたもの。

沖縄本島北部や先島諸島では清明よりも旧暦1月16日に行われるあのお正月「十六日祭」が盛んで、この時期に墓参りをする光景が見られる。清明、十六日祭いずれも、祖先祭礼として御願(拝礼)を行った後は祖霊と共に饗宴の場を持ち、親族同士が親睦を深めるという社交の場でもある。祖先を敬い、ヨコのつながりも大切にするという沖縄らしい行事だと言える。ちなみにこの時期、沖縄自動車道や墓地周辺の幹線道路には渋滞が生じると、「清明渋滞」「十六日渋滞」などと呼ばれる。

熱帯植物ずかん vol.05

～ヒスイカズラ～

科名: マメ科
学名: *Strongylodon macrobotrys*
英名: Jade Vine

ヒスイカズラはフィリピンが原産地の、常緑性のつる植物です。4月から5月にかけて、鮮やかな翡翠色の花を垂らします。まるで宝石の翡翠のように見えるので、英名では「Jade Vine」(翡翠のツタの意味)と呼ばれています。房状に咲く花の集まりは、長い物で1mを超え、300個もの小花が咲きます。

高温多湿を好む植物で、沖縄県では屋外でも育てることが可能です。挿し木、取木と実生で増やすことができ、苗木の状態から3年ほどで花を咲かせます。自生地ではコウモリや小鳥が受粉することで結実すると言われていますが、国内では条件がそろわないため、自然状態での結実を見ることはとても貴重です。

(田代 亜紀羅)



ヒスイカズラ全体



ヒスイカズラの花

ヤマクニブーが放つ昔なつかしい沖縄の香りを明らかにする

■ 独特な香りを放つ
ヤマクニブー

沖縄でヤマクニブー（※山九年^{ヤマクニブー}母）とよばれるモロコシソウは、サクラソウ科オカトラノオ属に分類される多年生の植物です。関東以南から小笠原諸島、沖縄に分布する日本の固有種で、低地や山地の林野に自生します。6月頃に高さ50cmほどの茎に黄色い小花を咲かせます（写真1）。沖縄美ら島財団総合研究センターがある本部町は、ヤマクニブーの数少ない産地です。ヤマクニブーは、衣服の香りづけ等の香料として、また害虫防除の役割として、昔から使われてきました（写真2）。甘酸っぱさやスパイシーさが混じったような独特の香りは、沖縄では「おぼあの家^{おぼあ}の香り」、「昔なつかしい沖縄の香り」などと表現されます。

近年、ヤマクニブーの生産者は減っており、あまり見かけることがなくなつたと言われているうえ、香り成分に関してこれまで研究はなされていませんでした。蒸したヤマクニブーが放つ独特の香氣成分、つま



写真1: 姿は目立たないが独特の香りを放つヤマクニブー

り、昔なつかしい沖縄の香りがする分子を明らかにしてほしいと地元の本部町関係者から相談があり、本研究を始めました。

■ 本部町伊豆味に伝わる
蒸す工程

ヤマクニブーは蒸すことで独特の香りを発します。本部町の伊豆味地区に昔から伝わる蒸し工程では、25分程度蒸した後、2日間陰干しして乾燥させます（写真3）。私たちが調べた限り、蒸したヤマクニブーを生活に利用するのは、沖縄地方独特の習慣です。本研究では、水蒸気蒸留装置という実験器具を用いてヤマクニブーを蒸しました（写真4）。他の



写真2: タンスの中に入れて香りを服に

不純物の混入を防ぎ、常に同じ条件で蒸すことができるようにするためです。

■ 香りの分子を探す

においとして人が感じられる成分は地球上に40万種以上あると言われています。40万種の中から、昔なつかしい沖縄の香りと感じられる分子を探すには大変な時間と労力が必要となります。そこで、固相マイクロ抽出ガスクロマトグラフィー質量分析法（SPME-GC/MS法）とごう、分析機器を用いた方法で、ヤマクニブーから揮発している分子を同定することになりました（写真5）。蒸した後のみ検出される分子があれば、それは私たちが探している分子である可能性が高いと考えました。分析の結果、蒸したヤマクニブーにのみ検出されるのは20種類あることがわかりました（図1）。現在、検出された20種類のおいを実際に嗅ぎ、蒸したヤマクニブーのにおいと比較することを計画しています。これによって昔なつかしい沖縄の香り分子の正体がわかると考えています。



写真3: 梅雨が明けるときに作業開始



写真5: 分析機器の力を借りて



写真4: 水蒸気蒸留装置に供されるヤマクニブー

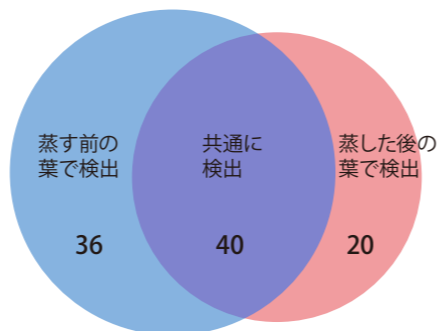


図1: ヤマクニブーの香り成分の変移

■ 今後の課題

本研究による香り分子が同定できれば、次の段階として、香料分野への発展はもちろん、アロマセラピーや臨床研究への展開が期待されます。たとえば、ヤマクニブーのにおいをなつかしいと感じる被験者に対して、なつかしさを司る脳の部位の研究や、なつかしさを感じたときのからの生理的な変化を調べる研究への発展があるかもしれません。また、ヤマクニブーの生産や利用を絶やさず、地域の振興に本研究を役立てるのも、今後の大事な課題と考えています。

（遠藤 達矢）

※ モロコシソウの別名

琉球王国時代の“時”を感じる 日影台解説会



日影台



日影台観覧会のようす

かつて首里城には、水時計を用いて時間を計測していたと考えられる漏刻門と、太陽(日光)の陰によって時間を計測していた日影台があり、その両方を用いて王国の時間を知らせていました。1739年、水時計を補完する役割として、はじめて日影台を製作し設置したと伝えられています。以後、この方法で1879年の廃藩置県まで時間を計測していました。

首里城内の建物は、琉球王国崩壊後、様々な用途に使われるために取り壊しや改変が行われ、さらに第二次世界大戦によって多くの建造物が焼失しました。日影台も同様に失われましたが、残欠と古写真・古絵図等の資料をもとに2000年に復元されました。日影台の計測板は、かつて1年間に24回、節気ごとに角度を調節していたと考えられています。どのよう調節していたのか判明していません。現在では、春分(45度)・夏至(64度)・秋分(45度)・冬至(10度)の1年に4回、それぞれの角度で作成した固定板を取り換えて計測の調整をしています。この時季にあわせて、復元された日

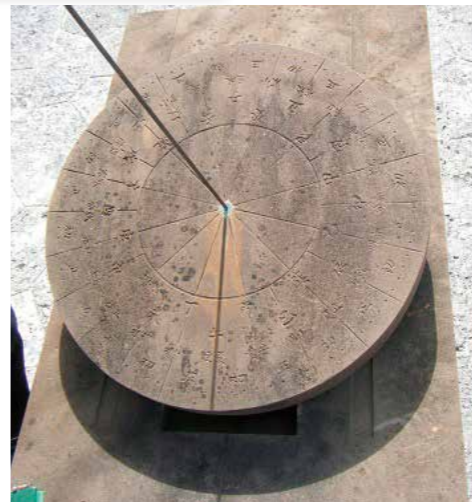
影台では「日影台解説会」を実施しています。通常は、木柵を設置して立ち入りが規制されている日影台ですが、解説会の際は、参加者は日影台の上のぼり、思い思いに観察しています。日影台の復元に関する解説や琉球王国の政治家である蔡温が、日影台を首里城内に設置するために西原間切(現在の西原町)において試験観測を行ったことに加え、日影台の近くに整備されている供屋に設置されている「首里城正殿鐘」(通称…万国津梁の鐘)についても解説しています。

日影台の前で、様々な解説を行っているうちに、太陽の影が「午」を指すと、手元の時計で12時30分ごろになつており、日本の標準時間と沖縄の時差が30分弱ある事が確認できることを解説すると、参加者から歓声があがります。解説会、多言語でのリーフレットも作成しており、外国からのお客様にもご覧いただいております。

ぜひ首里城にお越しの際は、日影台をご覧ください。(幸喜 淳)



時刻を正確に測るため、傾斜角度を変更する



影が計測板のちょうど「午」の刻を指している

日影台解説会

- 日にち** 春分、夏至、秋分、冬至の日、および近辺の土日
- 参加料** 無料 どなたでも参加可能 ※事前要申込み
- お問い合わせ** 首里城公園管理センター TEL.098-886-2020

御城物語 Vol.16

かつて、首里の人々が「御城(うぐしく)」と呼び、敬愛のまなざしで見上げた首里城。首里城とその周辺に関するトリビアを語る歴史エッセイ。

御後絵はどこにあったのか？

首里城公園南殿の壁には国王の肖像画が飾られています。これらは「御後絵」とよばれ、歴代琉球国王が崩御された際に描かれた肖像画です。現在は首里城公園の中で展示されている御後絵ですが、実は城内にあったわけではなく、首里城の北側にある円覚寺というお寺にありました。円覚寺は、1494年に第二尚氏王統歴代国王の菩提寺として建立され、国家行事として祭祀等が行われていました。往時は円覚寺伽藍の「御照堂」とよばれる建物の壁に御後絵が描かれていたのではないかと考えられています。琉球王国の正史のひとつ『球陽』によると、その御照堂が火事で焼けてしまった。

(幸喜 淳)



円覚寺(那覇市歴史博物館所蔵)

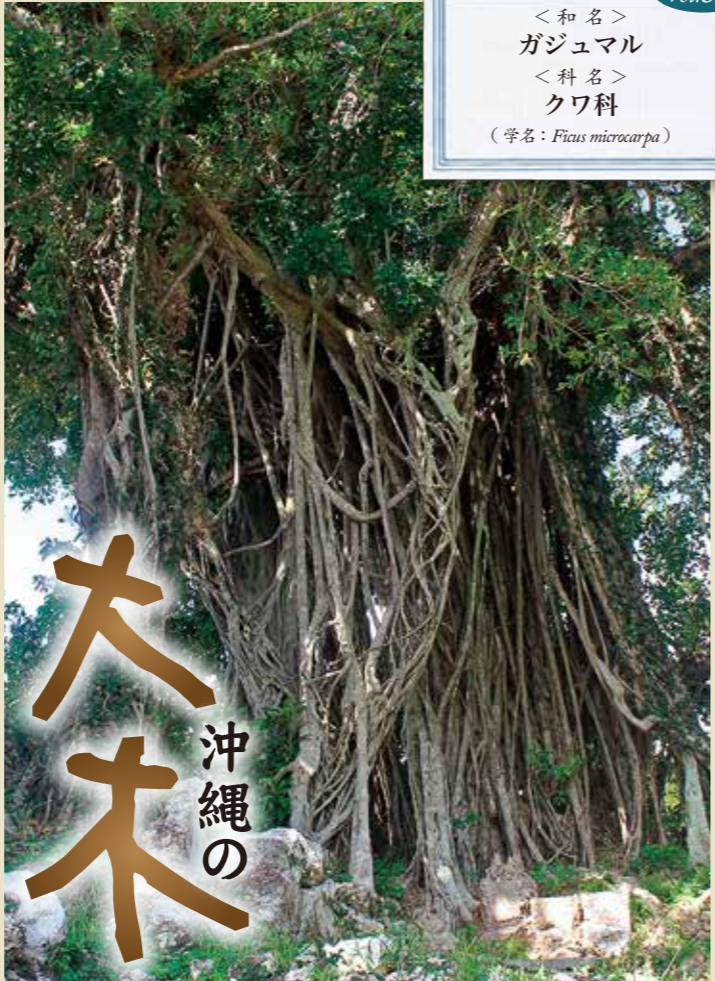


尚瀨王御後絵(しょうこうおうおごえ)

※1 琉球王国時代、王子(皇太子)が住んでいた屋敷。
 ※2 日本の染織家、沖繩文化研究者。紅型の技術を継承し、重要無形文化財「型絵染」保持者(人間国宝)に指定された。第二次世界大戦前に沖繩の文化財を調査した際に撮影した大量の写真や記録メモなどの資料は、先の大戦で壊滅に瀕した沖繩文化の保存や復興に貢献した。

Vol.39

<和名>
ガジュマル
<科名>
クワ科
(学名: *Ficus microcarpa*)



大木

沖繩の

ガジュマルは、屋久島、沖縄、台湾、中国大陸南部からオーストラリアにまで分布するクワ科の常緑高木です。横に大きく張り出した枝から多数の褐色の気根を垂らし、その一部が地面につくと太い支持根となり枝を支えます。大木になると、いくつもの支持根が伸びた独特の樹形を作り出します。その特異な姿から、木の精霊が宿るとして神木や霊木にもなっています。

八重瀬町当銘に自生する「当銘のガジュマル」は、幹周り18m、高さ12m、枝張りは東西方向12m、南北方向19mで、推定樹齢は300年とされています。

琉球王国時代から御嶽として崇められていた当銘のガジュマルの根元には、複数の拝所が設けられ、それぞれに神が宿るといわれています。正面の拝所には沖繩の王統の開祖といわれる舜天王が祀られており、現在でも行事初めには御願に訪れる地域住民も多く、地区のシンボルとして崇められています。

当銘のガジュマルは、『昭和63年巨樹巨木林調査(沖縄県環境保健部自然保護課)』で沖繩3位の巨木に選ばれており、その大きさから1992年4月に東風平町(現八重瀬町)の天然記念物に指定されています。

(鈴木 愛子)

地道な仕事の積み重ねで、 予約から入所式、 滞在、解散式までのすべてをスムーズに



名護青少年の家での「学び」 「体験」「宿泊」を全方位で支える

沖縄美ら島財団（以下、財団）が沖縄県立名護青少年の家（以下、名護青少年の家）の管理者として指定されて6年目を迎える。日帰りも含めると年間延べ人数で約3万5千人が利用。イベントは年間30〜35回開催し、県の教育指針に基づく主催事業と、財団による自主事業が半々だ。

「ハード・ソフト両面でキャンペーンの限界はありますが、利用団体数は伸びています。県内の学校の利用が優先にはなりますが、部活やスポーツ団体、個人、サークル、企業、あるいは姉妹都市交流など、積極的に幅広く受け入れたいと思っています」

と語るのは名護青少年の家の高英昭事務長。特に財団ならではの特色を打ち出せる自主事業では、財団が持つノウハウを活かした宿泊体験学習に力を入れていると語る。

『美ら島自然の学び舎』は、当財団の職員及び一般の専門家を講師として、子どもたちがやんばるの自然について学習する事業です。総合研究センターや美ら島自然学校などと連携してプログラム内容を企画しています。例えばウミガメを海岸に探しに行く2泊3日の体験学習などは、リピーターですぐに予約がいっぱいになる人気企画に成長しました。」

また、名護青少年の家の大きな魅力は、名護岳という立地。ハイキングや自然観察が楽しめる山道や遊歩道では200数十種類以上の植物が見られるという恵まれた環境。かつて名護岳で絶滅したといわれているナゴランを、名護青少年の家の敷地内に着生させ、育てる「ナゴランを育てよう」等、環境保全への理解を深めることを目的にしたイベントも実施することも重要な役割のひとつ。

「日常的な業務もしっかりと行うことはもちろんイベントの企画や運営といったソフト面での仕事は、講師やスタッフの手配・配置から教材の準備、告知、予約受付：小さな仕事の積み重ねがイベントの成功に直結していると思います」

その一方で建物や施設・設備の保守管理など、ハード面での管理業務も重要な仕事。日々の点検から万が一のトラブルの対応まで、こちらの仕事も多岐にわたる。浴室のポイラーから宿泊室の蛍光灯の一本にいたるまで、チェックを行う。細かい雑用のように見える仕事の一つひとつがパズルのピースのように重要で、どれが欠けて

もスムーズな運営は成立しない。

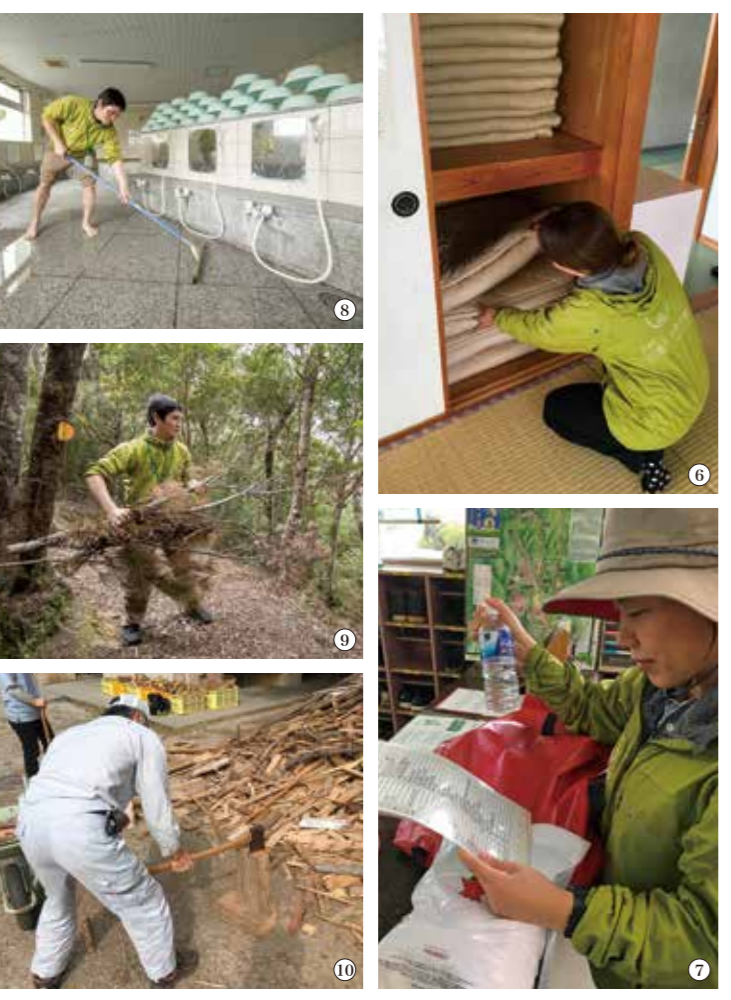
「管理者に指定されて6年。これまでの経験を軸として、今後はこれまでに以上に地域に根ざし、貢献したいと考えています。名護市と災害時の連携や、名護市消防本部と防災キャンプの開催も継続して取り組んでいきたいですね。また、スポーツコンベンションを支える施設として、事務局やボランティアスタッフ向けの宿

泊研修に携わることなども想定しています。実際、ツール・ド・おきなわの時には、ボランティアでマッサイジをする専門学校の学生達に利用いただいたんですよ。これからも大切な財産である自然と触れ合い、学べる場所として、名護青少年の家ならではの特色を持った施設であり続けたいと思います」

（文＝いのうえちず）



①「美ら島自然の学び舎ウミガメ特別編」
②ナゴランの普及啓発イベントに備え、苗の準備
③「ナゴランを育てよう」の様子
④宿泊する団体にオリエンテーションを行う入所式
⑤名護青少年の家 高英昭事務長
⑥寝具をはじめとする備品チェックも怠りなく
⑦登山用救急パックの準備
⑧掃除しながら点検も
⑨遊歩道をふさぐ折れた木の枝を撤去
⑩キャンプの利用客のために薪割りも





沖縄美ら島財団
総合研究センター
研究顧問
西大 八重子 にしおお やえこ

琉球大学(現・国立大学法人琉球大学)で家政学を学び、琉球調理師専修学校で教鞭を取っていたが、40歳を過ぎて沖縄初のフィニッシングスクール※1「西大学院」を開設。「女性がしっかりしていれば、家も国もうまくいく」と、次の世代を担う魅力的な女性たちを世に送り出している西大八重子さん。現在は沖縄美ら島財団総合研究センターで、琉球料理と沖縄の食材の専門家として研究顧問も務める。時代と共に変化する沖縄の食文化について、お話を聞いた。

「琉球料理の専門家になられたのは、大学で家政学を学ばれたことが大きかったですか？」
西大「私が琉球大学の学生だった当時、家政学の主任教授だった翁長君代先生は、奈良女子高等師範学校(現・国立大学法人奈良女子大学)で明治の子女教育を受け

た方でした。私たちは、それこそ箸の上げ下ろしから教えられました。当時、琉球大学には『家庭管理実習室』という一軒家があって、そこでクラスメイト4人と一カ月間、実習として生活をします。この間にお客様をお招きする機会があり、どのようにおもてなしをするか考えるのも課題でした。翁長先生は退官後、琉球調理師専修学

校の校長に就任され、私も同じ学校の教員になりました。その頃、『私があと10年若かったら、若い娘たちに暮らしのことを教えたい』とおっしゃっていたのが、私のころのどこかに残っていて、西大学院を開く動機の一つになったのかもしれません」
「調理師学校の教員というのが、西大先生のキャリアのスタートだったんですね？」
西大「そうですね。調理師学校に在籍中は、和・洋・中、さまざまな料理を試食する機会がありました。その中で感じたのは、伝統を受け継ぐということは、古いものをそのまま残すのではなく、創意工夫を加えて次の世代へ伝えることなのだということです。伝統的な料理というのは、その時代その時代で、人々がずっと知恵を働かせて、受け継いできたものだと思っています」
「その経験が、琉球料理の魅力伝える時に、ただ昔をふり返るのではないという先生の考え方に影響しているんですね。」
西大「そうですね。私は、琉球料理の魅力を伝える時のカギになるのは、尚順男爵※2(以下男爵)の

発想ではないかと思うんですよ。男爵のお屋敷であった松山御殿には専属の調理人がいて、男爵が召し上がるものと、ご家族が召し上がるものは、メニューも違えば配膳も別だったそうです。男爵が残されたものを、ご家族が召し上がったので、男爵の日常食の味を覚えていらつしやるご家族が、その味を戦後に伝えてくださった。男爵のお嬢様の故知名長子さまや、男爵のご子息尚詮さまのご夫人、尚弘子先生と一緒には、男爵の日常食を再現したことがあります。レシピを再現して感じたことは、今あるものをよりおいしく食べてもらう工夫があったということです」
「確かに、古い料理のレシピをただコピーしていても、現代人の口に合わなければ、その料理は結局淘汰されていきますよね。」
西大「伝統を守るといって、古いものをそのまま残すと思われがちですが、それだけでは伝統を受け継いでいくことはできないと思いますよ。一方で、琉球料理には琉球料理の良さがあります。私は岩手県で沖縄野菜の魅力を広めるため、ゴーヤー料理を教えたことがあります。ゴーヤーチャンプルー

を作ったところ、試食された方が『味付けはこれだけですか』と驚いていました。チャンプルーの基本は、だしと塩ですよ。きちんただしがきいて、いい塩梅のチャンプルーは滋味深いものです。岩手県の方に『素材の味が生きていてすばらしいですね』と言われて、やはり琉球料理の神髄は伝わるのだと思いました」

「食材である沖縄独特の野菜を受け継ぐことも大切ですね。」

西大「ゴーヤーの次はナーベラーを全国に広めたいと思っています(笑)。日本料理を何度食べに行っても飽きないのは、旬の食材を取り入れて、盛り付けにも変化をつけているからではないでしょうか。その点、琉球料理は決まったメニューが並ぶことが多く、改善の余地があるように思います。琉球料理の店に行くたびに、ワクワクするような新しい発見があったら楽しいですよ。」

沖縄の季節感とは日本の季節感とは少し違いますが、例えば旬の野菜を取り入れて季節感を伝えたり、食文化研究者で総合研究センター研究顧問の安次富順子先生がご研究なさった琉球菓子で変化をつけ

たりすることで、何度食べても新しい発見がある料理になるのではないかと思っています。沖縄の野菜は、スーパーフードに匹敵する栄養価の高いものが多いのも特長です。同じ野菜でも産地の違いをアピールすれば、驚きや喜びがあると思います。海の幸の季節感を取り入れるのもいいですね」

「県外には沖縄を常夏の島だと思っている方も多いですし、季節感を打ち出すというのは新鮮かもしれません。逆に、一年中いつでも食べられる豆腐を使った豆腐づくしのメニューなども、あまり見かけないので、面白そうですね。」

西大「豆腐も魅力的な食材ですね。男爵はお豆腐も大変お好きでした。『イタミルクジュウ』といって、しっかりと熟成させたお豆腐を召し上がった。男爵の随筆に残る息吹が、私たちに示唆を与えてくれると思いますよ」

「西大先生がお考えになる、琉球料理最大の特徴とは何ですか？」

西大「だしで旨味を出すことです。琉球料理では、かつおだし、豚だし、しいたけやかまぼこなどの魚のだしも使いますね。この複合的



琉球料理美饗にて提供される東道盆

なだしによる味の定義があれば、どういふものを琉球料理と呼ぶかが確定でき、その定義に基づいた発展形もあると思いますよ」
「何をもちて琉球料理と称するかという定義づけも含め、琉球文化財研究室で研究すべきことはたくさんありますね。」

西大「実は研究顧問になるまでは、沖縄美ら島財団がどのような活動や研究をされているか、くわしくは知りませんでした。現在、老舗の料亭である『琉球料理美饗』で伝承されている料理のレシピを記録に残す活動や、首里城鎮之間で観光客もお茶と琉球菓子が楽しめる取り組みも素晴らしいですね。」

総合研究センターには、琉球文化や歴史の専門家も在籍しており、研究機関としての層の厚みもある。西大学院でも職員を派遣していただきました。歴史や文化も含め、広く研究が進めば、琉球料理の魅力をもっと発信できるのではないかと期待しています」

「今後、どのような研究をしたいとお考えですか？」

西大「琉球の東道盆は韓国のクジョルパン※3と形状が似ていますが、中華料理をベースとした飲待料理と違って、中の料理の味は淡泊で琉球風です。中国の冊封を受けていた韓国に、どんな飲待料理が残っているか、作法やしきたりも含めて調べてみたいと思っています。それから琉球料理を生かす泡盛についても学びたいと考えています。」

(文)いのうえちす

※1フィニッシングスクールとは茶道、華道、テップルマナー、社交術、歴史や芸術などの文化・教養を幅広く学び、世界で通用するレディーを育てる学校

※2最後の琉球国王である尚泰王の四男で別名松山王子。文化人かつ食通として知られ、食に関するさまざまなエッセイを残した。

※3クジョルパン(九節板)とは韓国の伝統料理で、それを盛り付ける八角形の器もクジョルパンと呼ばれ、李氏朝鮮時代の宮廷料理として伝わっているのは、器の中央にクレープの皮のようなミルチョンピョンを置き、周りに盛り付けた具材を巻いてたれをつけて食べる料理。また、ドライフルーツなどの乾きものを盛り付ける場合もある。

総合研究センター活動報告会 初開催!

2017年12月23日、「総合研究センター活動報告会 美ら島再発見〜動物、植物、琉球文化から迫る〜」を沖縄県立博物館・美術館(おきみゅー)において開催しました。

総合研究センターでは沖縄の動物、植物、文化に関する調査研究や知識の普及啓発に取り組んでおり、今回は各分野から1題ずつ紹介しました。当日は定員を上回る参加者があり、最新の調査研究の成果や普及活動の内容を多くの方にお伝えできました。

また、会場外には展示スペースも設置し、当センターが所有する標本の展示や工作体験を行いました。実際に標本や文献等を手に取る方や、研究者との会話を楽しめる方など、多くの方にご利用いただきました。今後も最新情報をお届けできるよう取り組んでまいります。



	テーマ	発表者
1	沖縄美ら島財団 総合研究センターの教育普及活動 ～沖縄の美ら海・美ら島を未来に引き継ぐために～	普及開発課 泉 千尋
2	琉球料理の継承～“琉球料理 美栄”を中心として～	琉球文化財研究室 久場まゆみ
3	新しい花『ちゅらら』～絶滅危惧種リュウキュウベンケイの再発見、そして新品種の開発～	植物研究室 佐藤 裕之
4	外来魚ティラピアの不妊化による駆除の試み ～古き良き沖縄の川を取り戻すために～	動物研究室 岡 慎一郎

沖縄周辺海域のザトウクジラに関する論文 日本哺乳類学会論文賞を受賞

総合研究センターの研究グループが、沖縄周辺のザトウクジラの分布についてまとめた論文を、学術誌「Mammal Study」に発表し、同論文が平成29年度日本哺乳類学会論文賞を受賞しました。

21年に渡る長期データから、観察の難しい大型海棲哺乳類の基礎生態学的知見を得た点等が特に優れていると高く評価されました。本研究では、オスや子供を連れていないメスは沖合に分布し、子育て中のメスは、オスからの接近や沖合の荒海を避けて沿岸に分布していること等が示唆されました。本研究にかかる調査は、地元ホエールウォッチング事業者の方々をはじめとした、多くの方のご協力のもと継続することができました。今後も地元の方々と連携し、調査・研究を継続することで、ザトウクジラの資源管理や保全活動に役立ててまいります。



総合研究センター研究グループメンバー



ザトウクジラ

管理運営施設を会場に 「やんばるアートフェスティバル」 に協力しました

2017年12月9日～2018年1月21日の期間、大宜味村立旧塩屋小学校をメイン会場として、国頭村、本部町、名護市等の沖縄県北部地域(通称「やんばる」)にて「やんばるアートフェスティバル」が開催され、沖縄美ら島財団が管理運営を行う施設でもイベントが実施されました。今回ははじめての開催となる本イベントは、やんばる地域にあふれる「アートの種」を発見、体感、創作、発信、共有することで、失くしてはならない島の宝を次世代へ、未来へと運んでいくことを目的とした芸術祭です。

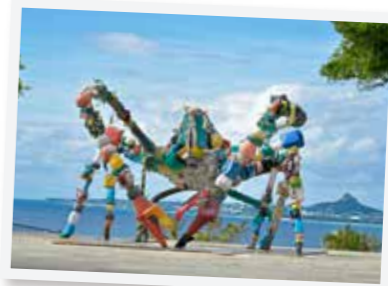
海洋公園では廃材を利用したアート作品「タカアシガニ」の展示、なごアグリパーク・美ら島自然学校では、アーティストによるワークショップやアートの展示、映画上映などのイベントが行われました。会場には家族連れをはじめとした多くのお客様が来場し、アートに触れて楽しむ様子が見られました。今後も管理運営施設を活用したイベント等を通して地域団体等との連携を図り、地域活性化に貢献していきます。



ワークショップ「沖縄に住む生き物クリップづくり」



イベント「みんなでおおきな絵を描こう!」



タカアシガニ

沖縄県立芸術大学 美術工芸学部・大学院造形芸術研究科 第29回卒業・修了作品展にて 「沖縄美ら島財団理事長賞」を授与

沖縄美ら島財団は、次世代の沖縄を担う若者の文化・芸術活動を奨励し、将来は沖縄を背景に広く世界で活躍してほしいという願いを込め、沖縄県立芸術大学美術工芸学部・大学院造形芸術研究科卒業・修了作品展において、「沖縄美ら島財団理事長賞」の授与を第27回作品展より実施しています。

2018年2月14日～18日に開催された第29回作品展では、沖縄の伝統技法である手結拵技法を用いた着物作品「たわわの果実」に当財団理事長賞が授与されました。

着物を果物の木に例え、バナナやパイナップルなどの果実を幾何色に染め分け、絵羽模様を柄柄を配置して表現された作品です。また「北中城村長賞」「北中城村文化協会賞」「沖縄県立博物館・美術館館長賞」がそれぞれ授与されました。

これら受賞作品は、本誌「南ぬ風」vol.47春号～vol.50冬号の表紙を飾る予定です。才能あふれる作品の数々にぜひご注目ください。



「沖縄県立博物館・美術館館長賞」
小林 実沙紀
作品名「泉へ向かうものたちの声を聴く」
Vol.49 秋号(予定)



「北中城文化協会賞」
仲村 達郎
作品名「君がいる場所」
Vol.50 冬号(予定)



「北中城村長賞」
堀本 達矢
作品名「在るケモノ」
Vol.48 夏号(予定)



「沖縄美ら島財団理事長賞」
大城 あすか
作品名「たわわの果実」
Vol.47 春号(今号)

後編集

紅型職人の加治工さんと、西大顧問のインタビュアーの間に話題に上がった「ルクジュウ」は、島豆腐を天日干しして作ります。食用だとおおよそ3〜4日置くそうですが、紅型用は型紙を彫る際に使用するため、さらに乾燥させて出来上がりはカチコチに。身近にある素材を使用してさらに発展させた奥深い世界を表現することの素晴らしさを、ルクジュウから考えさせられた今回の取材でした。

(編集事務局SK)

おもろさうしの

植物

其の十二

琉球王国第4代尚清王代に首里王府によって編纂された歌謡集「おもろさうし」に登場する植物の紹介コーナー。
※ 海洋博公園内おもろ植物園で見ることが出来ます。

(ナンバンカラムシ)

(前略)

又 上の糸は

又 もで合わしやり 水縄せ

又 まおの糸は

又 もで合わしやり 手縄せ

又 海直す

又 やゝの真帆 押し揚げて

〔第一三巻八五五〕

(前略)

上質の糸を

縋りあわして水縄にし

真芋の糸を

縋りあわして手縄にし

海を直して穏やかにし

立派な真帆を押し揚げて

(船を走らせよう)

〔解説〕

上質の糸を縋り合わせて水縄にし、真芋の糸を縋り合わせて手縄にし、海を穏やかに直して美しい真帆を押し揚げて、さあ、船出をしよう。「まお」は植物名。真芋。芋麻、からむしのこと。方言ではマールという。プーともいう。芋は麻の一種で上質の糸材。この繊維から糸や布を作る。夏衣の上等の原料である。

一口メモ

ナンバンカラムシは高さ1〜2メートルになる多年草で、葉にはザラザラする粗い毛がある。日本や中国を含む東南アジアからポリネシアに分布し、沖縄では宮島に分布、野山に自生している。栽培されている種類は野生種と異なり選別された種類で、繊維が強いのが特徴。別名「芋麻(まよま)」とも呼ばれ、沖縄の伝統的な織物である宮古上布や八重山上布の原料として使用される繊維植物である。その他の利用方法としては、茎や葉を薬用として、また家畜の飼料等にも用いられる。



おもろ名
科名 ナンバンカラムシ
和名 イラクサ科
方言名 マール、プー

※ 出典:「おもろさうしの植物」 発行:(財)海洋博覧会記念公園管理財団(現・(一財)沖縄美ら島財団)

沖縄美ら島財団



沖縄美ら島財団
総合研究センター



海洋博公園



首里城公園



美ら島
自然学校



当財団では、これまでに蓄積してきたノウハウを活かし、普及啓発、環境保全、地域貢献等の活動に取り組んでいます。

美らなる島の輝きを御万人へ

沖縄美ら海水族館



沖縄県立
名護青少年の家



なご
アグリパーク



沖縄県立博物館・
美術館(おきみゆー)



2018年4月発行

一般財団法人 沖縄美ら島財団広報誌

季刊誌 **南ぬ風** 春号 vol.47
2018.4~6

企画・編集・発行

一般財団法人
沖縄美ら島財団
Okinawa Churashima Foundation

〒905-0206 沖縄県国頭郡本部町字石川1888
TEL.0980-48-3645 FAX.0980-48-3900

制作・印刷/株式会社 東洋企画印刷 〒901-0306 沖縄県糸満市西崎町4-21-5 TEL.098-995-4444

ISSN 2189-4140